

第9回 校長会議あいさつ

R7.11.19 稲垣

立冬を過ぎて落葉樹が日ごとに彩を深めています。四月にはランドセルの重さにちょっと頼りなかった一年生の足取りも、見違えるようにしっかりとしてきました。小学校では、地域の方たちのお世話になりながら育てた稲やサツマイモが収穫を終え、子どもたちが嬉々として感謝の会に取り組む姿も見られます。また、中学校の合唱祭は、今年も生徒たちの思いのこもった歌声が響き、感動の内に閉幕したようです。

各学校では、そろそろ卒業式の計画が提案され、準備に取りかかる頃かと思います。そこで本日は、学校教育における式典の価値についてお話します。昨今、学校の現状を顧みない働き方改革の推進や「ワークライフバランス」の独走によって、ときに教育の目的と手段が混交され、その結果、学校教育が迷走してしまうことが懸念されます。以前にもお伝えしましたが、学校における全ての教育活動は、子どもたちの能力や人格、いわゆる「生きる力」を向上させるという価値を内包していなくてはなりません。授業や児童会生徒会活動は言うまでもなく、学校行事や清掃活動、給食指導をはじめ、あらゆる日常活動にも、教育的価値を見据えた指導の工夫や留意が大切になります。その中で、始業式や終業式等の式典の価値は、竹の節目に喩えられることがあります。その意義は、子どもたちに昨日までのことを一旦前向きに清算させ、気持ちを新たにさせて、今日からまた頑張っていこうとするモチベーションを持たせることにあります。とりわけ卒業式は一年の中で最も重要な式典です。学校経営上は、多くの来賓や保護者を迎えて、子どもたちの立派な姿を見ていただき、学校を応援してもらえるように信頼感を高める目的もあります。しかし、それ以上に卒業式には、子どもたちに向上のモチベーションを強く持たせられる教育効果が期待できます。そのような卒業式を行うためには、卒業生の誇らしさと在校生へのバトンリレーが要点となります。最高学年として皆のため学校のために、仲間とともに一生懸命やってきたという卒業生の自覚と学校愛、そしてそれを尊敬し引き継いでいこ

うとする在校生の想いがシンクロしてこそ、感動的で教育的な価値の高い卒業式となるわけです。式典中の卒業生の凛とした姿や卒業期の奉仕作業を指導する目的もそこにあります。式の運営や進行を生徒に委ねる中学校もありますが、それも有効な手立ての一つとなります。このように考えてくると、答辞や送辞(小学校では別れのことばと送ることば)の在り方が問われてきます。いずれも生徒全員を共感させ、皆の思いを一つにしていくシナリオでなくてはなりません。例えば中学校の卒業式の答辞を述べる生徒は、個人の想いに囚われてはいけません。卒業生の総意の代弁者として語る内容と姿勢が不可欠となります。代表者に、この高次元の意識の基に起稿させ、厳粛の舞台で語らせることは、学年、学校全体に勢いをもたらすのみならず、本人の精神年齢を高めることにもなります。退任式についても同様の意図が必要で、教育的価値から考えてみると、退任する教職員は、子どもたちに向けて、どのようなメッセージを残すべきかが明らかになってくるはずです。

以上のような考え方を、今後の式典の指導に生かしていただきたいと思います。